

仏学の消長とレオン・デュリー

Léon Dury, le sens de ses traces
laissées au Japon.

上 村 清 太 郎

1807年(文化4年)に、ロシア軍艦ナジェジダ号が長崎に来航し、開港通商を求める目的をもって、長崎奉行所で幕府代表と会談を重ねたが、交渉難航、ついに渡来の主旨を記したロシア語文書を残して日本を去った。この文書には満洲語訳、日本語訳、フランス語訳が添えられていたものの、前二者は拙劣で文意不詳、フランス語訳はこれが何語であるかをささ識別するものがなかった。やむなく出島のオランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフ (Hendrick Doeff) に見せ、ようやく、それがフランス語であることとその大体の内容を知ったと伝えられている。わが国がそもそもフランス語なるものに接したのは、これが初めてである。

長崎ではこの事件をきっかけとして、通詞たちの間からフランス語学習の必要を説く声が俄に高まり、翌1808年、通詞6名は幕府の許可を得て、前記のドゥーフ商館長からフランス語の手ほどきを受けることになった。1815年(文化12年)には早くも通詞たちによる日本最初の仏和字書「弘郎察辞範」の稿本ができた。長崎のフランス語学習は、その後いくらか中だるみの時期もあるにはあったが、総じて綿々たる伝統となり、1858年(安政5年)開設の英語伝習所(後年、英語所、洋学所、済美館、広運館などと改称)でも、フランス語は必ず教科に加えられフランス人教師による直接教授を明治初年までつづけてきた。しかし維新のあと、続々行われた学制改変に伴い、広運館は1874年(明治7年)長崎外国語学校、さらに翌年長崎英語学校へと改組、フランス語授業はついに跡を絶つにいった。

1859年(安政6年)の五港開港を機に宣教師の来日が増えるにつれて、北海道函館へメルメ・ド・カション (Mermet de Cachon) が着任する。カション師

は翌春同地にフランス語塾を開き青年武士の入門が相つのだが、1863年（文久3年）突然函館を去る。その理由は不明だが、このため、せっかく芽を出した函館のフランス語学習もむなしく消えうせてしまった。

ここで、医師栗本鋤雲とレオン・デュリー（Léon Dury）の名をあげておきたい。鋤雲は1858年函館奉行の命によりカションからフランス語を学び、彼に日本語を教えた。その間カションは函館に病院開設を計画し、パリの海外布教団本部に有能篤信の医師派遣を要請、白羽の矢を立てられて来日したのがレオン・デュリーであった（1862年・文久2年）。しかしこの病院設立は、ロシア正教司祭団が一足さきに病院を建ててしまったため沙汰止みとなり、デュリーは失意のうちに長崎へ向って立去ることになる。

大槻玄沢の「解体新書」が出た1826年（安政9年）以降、蘭学は江戸で目ざましい業績をあげていくなかにあって、村上英俊（1811—1882）も、オランダ語の学習にはげんだが、松代藩医のころ佐久間象山と語り海外から取寄せた化学書が、オランダ語でなく、たまたまフランス語で書かれていたところから、英俊は一念発起、1848年（嘉永元年）5月から蘭仏字書を筆写するという前代未聞のやり方でフランス語の独習にのりだした。3カ年ばかりで一通りの仏文を読解するにいたったというが、文字通りの独学であり、われわれの想像を絶する刻苦勉強であったであろう。1854年（嘉永7年）には「三語便覧」（仏英蘭対照字書）を刊行、1859年（安政6年）幕府の蕃書調所教授手伝に就任、1861年（文久元年）にいたって英俊門下の後進2名とともに蕃書調所でフランス語を教えはじめた。1864年（元治元年）「仏語明要」出版、アルファベット順によるほか、品詞の別をも加えた辞書らしい辞書の元祖である。英俊は開成所（蕃書調所の後身）を辞任ののち、1868年（明治元年）家塾「達理堂」を開き1877年（明治10年）閉塾までの約10年間、すぐれた門下生を多数世に送り出した。他方、蕃書調所は開成所、ついで開成学校となり1869年（明治2年）には大学南校と改称、ここには仏蘭西部がありフランス人教師がフランス語で講義するのを常としていた。また1874年（明治7年）に官立外国語学校、1877年東京大学（1886年から帝国大学）が設立されるなど、英俊の「達理堂」とともに仏学は着実に成長していった。

1864年（元治元年）横浜において下関通航、横浜鎖港についての談判が、幕府

と英仏米蘭4カ国との間に行われた。幕府側には前記の栗本鋤雲が、フランス側にはロッシュ公使の通訳官としてカションが加わっており、この二人は奇しき再会をよろこび合うのだが、二人の気脈を通じた裏面工作によって幕府とフランス側との折衝は、はなはだ好調であったらしい。この外交談判の副産物として、フランス政府は横須賀製鉄所の建設を一手に引受けるとともに、フランス陸軍将校団を幕軍の調練に当らせることになった。かくして雇入れたフランス人技師・職工や将校たちとの接触から、フランス語を解する日本人の養成が急務となり、1865年(慶応元年)フランス政府の協力を約束された幕府直属の「横浜仏蘭西語学伝習所」(横浜表語学所ともいう、仏名“Collège Japonais-Français”)が開かれた。初代所長は川勝近江守、フランス人による組織的なフランス語授業をはじめたが、1869年(明治2年)明治政府はこれを接収、兵部省兵部寮の所管となり、間もなく「中央幼年学校」という軍人養成機関に変質していった。

さきに名をあげたレオン・デュリーは、函館から長崎に移り、同地駐在のフランス領事になった。ここには1858年(安政5年)長崎奉行の設立した英語伝習所があり、後年「広運館」と改名したことはさきにも述べたが、デュリーは領事在勤の末期である1870年(明治3年)にこの「仏語教師」となり「仏学生四拾八人」(そのなかに西園寺公望の名が見える)を教えた。しかし広運館の経費が文部省から削減され、これが1871年にデュリーを惜しまれつつ京都に去らせる結果となった。京都府は洋学の急務に応えようと学校開設につとめつつある矢先であったから、デュリーを3カ年契約で雇入れ京都府仏学校を設立、長崎広運館の優等生数名も助教として通訳をつとめることになった。この仏学校は初め木屋町のとある露路裏の空家を教場としたが、やがて知恩院の華頂宮旧邸に移った。1872年の仏学校生徒数は72名(女生徒9名を含む、ちなみに英学校生徒数150名、独学校生138名、以上三校を一括して欧学舎と呼び生徒総数363名)に達し、京都の外国語教育ははなはだ活発であった。デュリーの信望はきわめて厚く、契約満期の1874年(明治7年)には、京都府から文部省に俸給の継続支給を再三要請した。京都府は雇用主だが、俸給を官費に依っていたからである。しかしその要請はついに認められなかったので、京都府は経費節約のため仏学

校の閉鎖に踏切り、デュリーは退任せざるをえず東京に赴くことになった。

以上はごく大雑把な回顧を試みたにすぎないが、これだけでもなお、仏学が他の諸分野で見られるように、地方都市で衰退を余儀なくされる一方、東京で集中的に伸びていく過程をほぼ推測させるに足るのではないと思われる。そしてデュリーの足跡——函館・長崎・京都・東京というその道筋は、このような仏学の動向を身を以って象徴しているかのようである。デュリーは筆者の縁者(故人)にとって恩師であった因縁からも、経歴の概要を次に補足しておきたい。

レオン・デュリー(1822—1891)は、地中海沿いの南仏ブーシュ・デュ・ロース県(Bouche-du-Rhône)のランベスク(Lambesc)に生れた。マルセーユで医学を修めて学位をとり、内科外科の臨床医として少しは人に知られるほどの成功を勝ちえた。さきに述べたように志を得ず函館から長崎に移り、初代領事に任命されたのが来日の翌1863年(文久3年)である。

1867年(慶応3年)賜暇帰国の日を待っていたデュリーは、折りからパリ万国博覧会へ派遣の徳川昭武民部大輔(将軍慶喜の弟)、向山隼人正外国奉行ら幕府使節団一行の案内役になることを求められ、同行した。パリではナポレオン三世の使節接見にも同席した模様だ。翌年長崎に帰任したが、1870年(明治3年)長崎領事館が普仏戦争突発のあふりを食って閉鎖されたため、広運館のフランス語教師になった。彼にとって終生の好同伴であったジョゼフィヌにめぐりあい結婚したのもその頃である。新婚のデュリー夫妻は翌年京都に移るが、それは長崎で知合ったガワー英国領事(A. A. J. Gower)が、京都府参事楨村正直にデュリーをフランス語教師として採用するよう懇篤な推薦状を送ったのがきっかけとなったのである。デュリー夫妻雇入れの「条約」によると、「住家一軒ヲ貸シ渡可申事」、「デュリー君俸給ハ」1カ月洋銀250ドル、「細君ハ婦女子ノ生徒ヲ教育ノ為」洋銀100ドル「ヲ相渡シ可申」、「尤モ時価ヲ以テ日本紙幣ニテ相渡ス儀モ有之候事」、「語学ノ外当府下ノ為ニナルヘキ事ヲ京都府庁有司ヨリ相談ニ及フトキハ詳悉ニ答論シ其事ヲ補助スヘキ事」など、文明開化、殖産興業の明治初年らしい契約の文言である。

デュリーは全寮制の仏学校で生徒と起臥寝食を共にした。すなわち毎朝4時

起床、フロックコートを着用、礼拝をすますとただちに教室に入り生徒の復習を監督し、8時に朝食、それから運動場で「撃剣弓術ヲ稽古」させたり、あるいは旧藩でしたような笛太鼓を使うフランス式軍事教練を自分が指揮して行う。9時にフランス語授業を開始、午後は万国史、世界地理、理科、数学などに当て3時の休憩を除き6時まで続行、夕食後の休憩が終ると9時就寝まで補習をしてやるといった精励振りを終始変えなかった。70余名の生徒を幾クラスかに分け2名の上級生に下級生の授業を手伝わせるほかは、一切の教務を一人で切りまわした。生徒の勉学素行については、きわめて厳格で、タバコを吸う者を見つけたときなど、これに鞭を加えたこともあったらしい。その半面まことに親切であって、自費で生徒の寝台を買入れ、みずから散髪をしてやり、寄宿舎を巡回して生徒の寝相に気を配り、外出する生徒の服や帽子にブランをかけてやるなど「慈母モ及バザル」配慮をした。筆者の縁者であった老人が、デュリー先生の顔写真を恩賜の銀時計の裏側に貼りつけて肌身はなさず愛用し、先生を追慕してやまなかったのもうなずける。

ジョゼフィース夫人も1872年(明治5年)に設けられた京都府女紅場で「普通学」を教えた。なおデュリーは日本初のジャカード織機を輸入する推進役を果たしたことも一言しておく。

1875年(明治8年)4月、前記の事情で京都から東京に転じたデュリーは、東京開成学校でフランス文学、歴史などを講じ、さらに翌年には東京外国語学校でも教鞭をとった。京都府は仏学校の「生員ノ俊秀」をデュリーに託し官費生として東京で仏学をつづけさせた。この官費支給が途中で廃止されたので、デュリーはこれらの生員を自分の官舎に引きとり就職の世話をするなど旧門下生の面倒をもよく見てやり、かれらは先生の厚意に深く感銘したと伝えられている。

開成学校の2カ年の任期が終った1877年(明治10年)春、在留十数年におよぶ日本をあとに帰国することになった。別れを惜んで京都に立寄ったデュリーは、京都市とリヨン市とがさまざまな点でよく似通っているとの考えから、京都府にたいして優秀な生徒をリヨンに留学させ、将来京都市の産業振興に役立たせるべきだと進言し、自分が留學生の保護監督を引受けてもよい旨を伝えた。京

都府もこの勧告に同意、ただちに旧生徒(仏学校でフランス語を学んだもの)4名と新生徒(京都府師範学校生員でフランス語を修めていないもの)4名を選び、留学期間を前者3年、後者4年とした。まだ17歳という年少者をも交えた8名は、フランス到着後6日目にして早くもマルセーユの小学校へ、ついでリヨンの普通学校に進みフランス語の習得にはげんだが、デュリーが榎村京都府知事に寄せた報告によると、新生徒もわずか50日の間にいくらかフランス語を話すようになったそうで、勉強のほどが察せられる。このようにして1カ年を経たのち、デュリーは苦心の末、各人の資質に応じて織物、製麻、製糸撚糸、染色、鋳山、陶器、機械、美術のなかから一科目を選び、それぞれ適当な専門学校に入学させ、時には所在地を訪ねて勉学状況を見て廻り、これを京都府知事に報告した。

デュリー帰国後の住まいはマルセーユ。1888年(明治21年)、在マルセーユ日本名誉領事となる。1891年(明治24年)10月病に伏し死期の近いことを悟ると、身柄を同地の日本領事館に移されんことを乞い、「軍人は戦場で死ぬことを名誉とする。領事もまた領事館で果てるべきだ」といい、3日後に日本領事館で72年の生涯を閉じたそうである。

生前デュリーから親しく薫陶を受けた教え子たちが主となり、1899年(明治32年)恩師を偲んで京都南禅寺に鞍馬石の立派な記念碑を建立した。碑面の上部には“A LA MEMOIRE DE M. LEON DURY”とあり、その下に文学博士重野安禎の撰文が刻まれている。文中にある「懇惻切至、寛猛並用」、「愛護訓督、莫不備至」などの句は、碑の由来を語って余すところがない。この碑のうしろに、一人の教え子の別邸があったけれども、第二次大戦のあと居住者が変わり、デュリー碑もどうしたことか元の場所に見当らなくなった。

参考文献

長崎市役所編「長崎市史・地誌編名勝旧蹟部」

滝田貞治「仏学始祖村上英俊」

高梨光司「稲畑勝太郎君伝」

富田仁「仏蘭西学のあけぼの」

文部省第十八年報

重久篤太郎「お雇い外国人(5)―教育・宗教」

寺尾宏二「明治初期京都経済史」

田中緑紅「明治文化と明石博高翁」

京都府教育会「京都府教育史」

